
A L I C E in the DARK

鮎塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A L I C E i n t h e D A R K

【Nコード】

N 1 2 7 4 D

【作者名】

鮎塩

【あらすじ】

死者の森で目覚めた僕に、アリスは微笑んで言った。「この森では誰も信用してはいけません」と。遅刻魔の黒兎、無邪気なチエシヤ犬、おかま帽子屋、常識人の五月兎 人喰いの闊歩するダークファンタジー。

prologue : 愛しいキミへ（前書き）

ちよつとだけ文章校正しました。
話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

prologue : 愛しいキミへ

走る。

走る。

走る。

もどかしいほどにゆっくりゆっくり、崩れたレンガ壁が、割れたガス燈が、路上に放置された死体が背後へと流れてゆく。

餓死した遺体も、ゴミ箱を漁るやせこけた犬も、路上に溢れかえる職にあぶれた人も、みんな見慣れた私の街。

なのに月だけがいつもと違う。紅い瞳みたいな真ん丸い月が私をどこまでも追ってくる。

やせ細った私の手足が、錆びた機械のように悲鳴を上げる。それでもひたすらにもがくように動かす。

走れ、走れ、速く、はやく！

どれだけ走っても走っても、ちつとも前に進みやしない。

景色は確かに変わっていくけれど、似たような路地ばかりで。小道も大道路も色あせて、どこもかしこも廃墟のようだ。

ガク、と左足に違和感。

ああ、割れたガラスを踏んでしまったみたいだ。気をつけなければ。荒れ果てたこの街にはいろんなものが落ちている。

グッ。よろめく身体に力をいれて、私はまた駆け出す。

血のあふれる痛みすらも、遠くて。

ボロボロの素足はもう元の色なんて分からないくらい真っ黒だ。もう転びさえしなければいい。

まだ走れる。だから、いいんだ。

走る。

走る。

.....。

本当に私は走っているのだろうか。

タールのように重たい空気が纏わりついて、夢の中を泳いでいるようだ。

まあ、間違いなく夢なんだろうな、と鈍い頭が答えを返す。これは悪夢だ。

どれだけ走っても血色の月の大きさが変わらないのだから。

走る。

走る。

逃げる。

逃げる。

逃げなければ。

アイツがオツテクル。

バッグいっぱいのお札束でも、パン一個すら買えない国。家をなくした人々が路地に座り込んで日々を過ごす。

幼い私に、国の現状なんてよく分かっていたいなかった。

死が日常に闊歩^{かつぽ}する。それが当たり前なのだと思っていた。

崖っぷちに片手でしがみついている人生だったけれど、それでも生きてこれたのだ。

逃げなければ、殺される。

何度も恐怖に負けて振り返る。姿が見えなくても安心はできない。頭から流れつた血が視界ににじむ。赤い月が赤い闇に溶けて歪む。

殺されて……………クわれる。

人は獣なのだ。

2本の足で大地を踏みしめ、牙をなくし、火をおこし、言葉を操つても。

本能を無くしたように見えても、たしかに人は獣だったのだ。

いまの私は生きるために駆け続ける草食動物。アイツは……食欲に支配される肉食動物。

道端でぐったりした子供が、私の狂った視界を掠める。疲れきった老人のような瞳をしていた。

きつと私も、おんなじ眼をしているのだろう。

「……………あつた！」

私は無我夢中ながらもちゃんと辿りつけていたらしい。むかし偶然見つけた、だれの縄張りでもない下水道へと通じる道。寂れた廃工場の裏手にそのマンホールはあつた。

夜露もしのげるうえに、野犬や……………人間に襲われる心配もない。絶好の隠れ場所で、幸い凍死するような季節でもない。

息も絶え絶えの私にとって、蓋を開けるのは大変だった。工場からとってきた鉄の棒でどうにかこうにか抉じ開けた。

枯れ枝のような指はジンとしびれ、手のひらは血だらけ。爪はすべて割れてしまった。

皮がむけて血が覗く手。いつか絵本で見た柘榴ざくろのようでおいしそうだと思った。

暗いマンホールの穴をのぞく。月明かりだけで降りれるだろうか。

私は梯子に一步、足をかける。ただそれだけのことなのに、自分から化け物の口に飛び込んだような心地がした。

でもいまさら引き返せるものか。帰る場所なんてもう……………ないのだから。

これが最後、と夜空を仰ぐ。不気味な月光は夕日と同じ赤色なのに、どうしてこつちも違うのだろう。

今までずっと私を追ってきたこの月ともやつとさよならできる。

そして私は、地上に別れを告げようとして、

バキリ。

絶望的な音を聞いた。

長い年月を経て腐食していたんだろう。足をかけていた部分があつさりと折れた。

無意識にのばした手が無事な部分を掴む。そしてそこも折れる。違う、折れたんじゃない。

折れたのは私の　　ゆびのほうだ。

体重を支えきれずほんとうに枯れ枝のようにおれてしまった。笑えてくる。

そんなにもこの身体は限界だったのか。

落ちていく

落ちていく

おちていく

？

闇の中へ。

もう赤い月すら見えない。

この穴に底はあるのかな。なかったら生きていられるかな？
もうそんなのどうだっていいか……。

すべてがぼやけて見えるのは、入りこんだ血のせいかな。それとも
。

「………………。いやな夢……………」

私は窓からあの日のように夜空を仰ぐ。赤い月なんてかわいいものだ。

常闇のこの世界には青のいびつな月が浮かぶ。不可能の象徴たる青い薔薇のように、それは見る者の心をざわつかせる。

昂揚であり畏怖であり……………安堵。

ここが私のいるべき場所。もしかするとあの街より異常な世界。それでもあの悪夢から目覚めるたびに、夢でよかったと思うのだ。

「……………？」

「ごめんなさい、お父さま。起こしてしまった？」

「……………、……………？」

「なんでもないの、大丈夫」

私の隣で寝ていた養父 ヴェノムの気遣わしげな瞳に微笑む。
彼はめったに言葉を話さないけど、その気持ちが嬉しいほど伝わってくる。

「……………」

「うん、おやすみなさい」

くすり、と微笑む。彼は悪夢を良く見る私のために、わざわざ一緒に寝てくれる。
心配性な父の艶やかな黒髪をやさしく梳^すく。さらりと手をすべる感触に落ち着きをとり戻していく。

「夢で、よかった」

今が幸せだから戻りたいなんて思うわけがない。

「ありがとう……………お父さま」

異常が正常、常識が異質、異形が基盤、一步外に出れば人食いが口をあけて待っている。
そんな世界で居場所をくれたお父さま。

愛しています。

たとえ

私は、ペットにすぎなくても。

了
p
r
o
l
o
g
u
e

prologue : 愛しいキミへ（後書き）

スローペースですが、ちゃんと続けて行きたいと思います。
次から本格的にエグくなる予定。

はやく帽子屋とか出したいです。うずうず。

語彙が無くて拙い小説ではありますが、お付き合いいただければ幸いです。

ウサギのから騒ぎ 1（前書き）

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 1

1

ほんのささいなすれ違いのはずだった。

素直に頭を下げれば、彼女は笑って許してくれるさ……なんて、傲慢な思い込みでしかなかったんだ。

並べられた嘘のドミノが、終わりに向けて倒れていく。徐々に、徐々に、速度を上げながら。

君と築いてきた幸せな思い出すら、巻き込んで止まらない。

枯れた声

むせび泣く君。

信じられない、もう信じたくない。

うずくまる背に手を掛ける。

振り返ったのは僕だったのか君だったのか。

そして、最後のドミノが倒れる。

+

木の根元に、漆黒のクレマチスが一輪だけ咲いている。

木は奇怪にねじれ、老人が苦しそうに悶えている印象を与える。おまけに葉は虫くいだらけで、色は紫。しかし別段めずらしい訳ではなく、この森では一般的なものである。

陰気さがこの上なく、常夜の森にふさわしい。

しかしこの花は違う。森に棲むモノたちにとって、クレマチスは特別なものだ。

もちろん私にとっても。

花はたった一瞬で出現した。出芽もなにもかもの過程をすっ飛ばして、気がつけば蕾がほころぶところだったのだ。

私は花弁を両手で掻き分けのぞきこむ。そう、この花はとっても大きい。

なにせ、人が入っているのだから。

「じゅんばんは」

「……………?」

あいさつをすると、キョトンとした目をされた。そこには青年が胎児のように身体を丸めて眠っていた。

「あ……………？　ぼく、は」

「お目覚めですか？」

「めざ……………？　寝てたのか？」

その青年はゆっくりあたりを見回す。私を見て、寝転んでいた花を見て、空を見上げて、また私を見る。

さて、こういうのは初めてだから、どう切り出したものか。こんな私の柄じゃないってのに。

私が少しだけ躊躇っていると、再び空を仰いだ青年が愕然とする。

「あ、青い月！？」

「あれが本当に月かどうかは、調べようが無いんですけどね」

シュークリームのようにでこぼこな、不自然なまでに青いそれ。まあそれ以外に呼びようがないので、私も月と思うようにしているが。

「こ、ここは一体………………。僕はたしか、」

「死んだはずなのに？」

「！」

自らの口を押さえる青年。声に出して言ってしまったのかと思ったのだろう。小さな咳きは、耳のいい私にははっきり聞こえていた。けれど聞くまでもない。こうして花で眠っていたということは、それが答えなのだから。

「……………君は」

「私はアリス。アリスです。苗字はありません。好きなようにお

呼びください」

その青年の手をとり、花からそれとなく引きずり出す。彼は困惑と疑問符が頭にぎゅうぎゅうと詰まっているんだろう。彼は私のなすがまだ。

「あ、花が……………」

夜に染まったようなクレマチスは、早くも枯れ始めている。

「もうこの寝台は役目をまっとうしましたので」

私は花にそつと触れる。青年は自分を包んでいた花をぼうつと見つめる。

少し痛んだ栗色の髪に、銀縁の眼鏡。20台半ばだろうか。どこか憂いた表情をする人だと思った。

「ええとアリス、でいいか？　ここはなんなんだ……………」

「ご安心下さい。ちゃんとご説明いたしますので」

「あ、ああ」

「その前に、耳を澄ませてください。声が聞こえませんか？」

「カラスの声しか聞こえないけど」

「……………カラスの声なら私にも聞こえています。そういうものではなく、物理的に耳で捉える声ではありません」

「ち、違うのか？」

「空耳に近い感覚で貴方を、いえ貴方だけを呼ぶ声が聴こえるはずですよ」

「ええと、ちょっと待ってください」

何が何だか分からないままの青年は、それでも真摯に耳を澄ませる。

「？」

そこでやっとなにかに気づいたか、彼はあらぬ方向を見つめる。遙か彼方にそびえる、城というには巨大すぎる古い建築物、そこよりも少し南に行ったほうか。

脳に直接響く声という話だが、それはどんな感覚なのだろうか。青年はその不可思議な現象に眉根を寄せている。

「……………あちらから聞こえるんですね？」

「あ、ああ……………。微かだけど、誰かが遠くから呼んでるみたいだ」

その声が聞こえるのは当事者と”ある立場”のものだけで私には何も聞こえない。

右も左も分からない青年に頼るしかないとは何とも心もとないが、私にも止むを得ない事情があるのだ。

それもこれも、あの遅刻魔のせいだ。

「では移動しながら話しましょうか。一刻も早くここから離れないと。ずいぶん時間がたってしまいましたから」

「ここにいて何かまずいのか？」

「ええ、それはもう」

私はエプロンスカートに隠された太ももに手を這わす。ギョツとする青年を視界の端にとらえたまま、二本の銀製コンバットナイフを引き抜いた。

「まさに今、やっかいなのが来ましたから」

「な、何言って……………」

青年の疑問をかき消して、木々の合間から二つの質量を持った影が花の真上に降り立った。

私は逆手に持った特殊銀のナイフを隙なく構える。

敵は2匹。両方とも私の腰ぐらいまでの大きさで、大腸を連想させるグニヤリとした芋虫（のようなもの）にカマドウマの足が生えている。その異形たちは威嚇するように身震いした。

この生理的嫌悪に比べれば、台所に出没するGのつく天敵がいつそ可愛く思える。

出来れば斬りたくない。いやーな汁が出るからだ。

醜悪な異形の片方は全身が血まみれ、もう一方は口周りを同じく朱に染めて、何かを食べているのか口がもぞもぞと動いている。

「う……………」

庇った背後で青年のうめき声があがるがそれだけだ。パニックに陥って闇雲に逃げ出したりする気配はない。

「落ち着いて、大丈夫ですよ。それより下手に動かないで下さいね」

「……………アリス？」

「その虫けらども。邪魔だからどいてくれる？」

クアクア！

クアクア！

カラスに似ただみ声、その2重奏が私の挑発を嗤うように森の闇を掻きまわす。それはその悪夢のような怪物2匹から発せられていた。

「……………さっき耳を澄ましたときに聞こえていたのは、こいつらの

声だったんですよ。ここにはカラスなんていませんから」

突然の異常事態に青年は声もない。

『……………、……………イ』

クアクア。

クアグア。

やがて鳴き声にノイズのように不快な音が混ざり始める。

『……………あまイ におい……………』

それは拙いながらも芋虫の発した意味ある言葉だった。
知能があるのか、と青年のおどろく気配がする。

『ニンゲン』

『ニンゲン だ』

背後で私の服のはしを青年が掴んだ。その手からかすかに、押さえるような震えが伝わってくる。

血まみれの不気味な異形。

あれらの怪物が望むモノは誰の目にも明らかで、どうやっても友好的には見えないだろう。

見えたのなら気が狂っているか、よほどの虫好きで且つ気が狂っているか。

『ありす』

『ありす』

『ジャマする ナ』

『れディ ピッグ、ジャマスルナ!』

ガア!

芋虫はひときわ高く吼えると同時、その身体をしなやかにたわめて、

「あ、アリス……!」

「ご安心を」

私は青年を後ろ手に押し倒しながら、右手のナイフをすばやく投げ打つ。

標的は、今まさに飛び掛ってこようとした芋虫 ではなく先ほどの黒いクレマチス。

狙いたがわずナイフはほとんど枯れかけた花に突き立つ。花卉の裏に取り付けておいたモノをも貫いて。

私たちが伏せるのとほぼ同時に、爆炎が陽の昇らない森を真昼のように照らし出した。

押し倒したために青年の顔がすぐ近くにある。当たり前だが啞然とした顔だ。

何が起こったのか分らないと、彼の目が問いかけている。

「指向性の爆発トラップです。あの花びらに仕掛けていたんですよ。」

「トラップ!？」

「まあ、こんなこともあるつかと」

身を起こして煙の晴れた視界を確認する。あいつらの姿はない。石炭みたいなものが残っているが、それが花かそれとも芋虫だったモノなのかは分からない。

落ちていた銀のナイフを回収して点検する。

うん、やはりこれは逸品だ。傷一つなく愛刀は無事だった。

「いつのまにそんなものを。……………あ、花に触れたときにか」

「嫌な気配が近づいていましたから」

私は一つ頷いて、一枚のトラップを取り出してみせる。

「これがそれです。一定の負荷をくわえると爆裂するトラップなんですよ。さっきのは上方へと指向性を持たせてあるものですね」

「……………はは、……………物騒なメルヘン道具だな……………」

至近距離にいながら私たちが無事なのもそういうことだ。

このコンバットナイフといい、さすがあの伯爵製である。あいつの性格はともかく腕はすばらしい。

「うまく花の上に降り立ってくれて良かったですよ。へたに斬つてたら二人とも黄色の液体まみれになってるところでした」

「そ、そうか」

そんな理由かと驚くべきか呆けるべきか、青年は表情の選択を迷ったあと、そのどれとも違う選択をした。

「あ……………。そうだ、助けてくれてありがとうアリス」

「……………いえ」

私は無意識に頬の傷跡をなでた。かすかに痛むと同時に苦い敗北がよみがえる。

「！そういえば、怪我してるな。それ大丈夫なのか？」

「まだ完治していないだけで、今回の怪我ではありませんよ。」

「でも」

「で、声が聞こえるのはあっちでしたね？　今も変わりませんか？」

「あ、ああ……………」

青年の背を押して歩き出す。まだ彼の戸惑いは濃くても、進まなくては話が始まらない。

面倒くさい。

「じゃあ、ここを離れたらちゃんと治療しないか？」

この人は案外お人よしののだろうか。

しかし説明が悪かったか、どうも勘違いをしているようなのでユルリと首を振る。

「いいえ……………違いますよ」

今いるここが特別に危ないのではない。そんな意味じゃない。

この森に安全な場所なんて中央にそびえる女王の古城ぐらいだ。違う？と振り返る彼に、私は淡く笑う。

「あなたが　　あれらを惹き寄せるんですよ。甘い甘い香りを放っているから」

青年がゆっくりと目を見開く。

彼が蹲っていたあの花には、その芳醇な香りがたつぷり滲みこんでいた。

私がわざわざ花に……それも使える状況がかなり限定されるトラップを仕掛け、しかもそれが無駄にならなかったのは、ひとえにその香りに奴らが群がると知っていたから。

「さあさあ、もっとペースを上げて歩いてください。一箇所に留まっ
つていても出口はやってきませんよ」

「甘い香り……？」

「あなたを喰らうために、どんどん集まってきます。逃げ切りま
しょう」

青年は自身の腕に鼻を寄せ、そんな匂いはしないけどと頻りに首を
傾げる。

青ざめた月はいつもと変わらずに不気味な沈黙を守る。ただそこに
あるだけで、ここが異質な世界なのだと突きつける。

「ここは死者の森。人々が生まれかわるべく、死した魂が辿りつく
最後の場所」

「……………」

死した。

青年は確かめるように、その呟きを落とす。

「……………ああ、そうか……………」

彼は骨ばった手のひらを無造作に眺め、次いで痛みを堪えるように

肺があるあたりを押さえる。

「……………やっぱり僕は」

死んでたんだな、と。

青年は苦しそうに、やりきれない感情を抱えて、私と目を合わせる。

「この森では誰も信用してはいけません。ここにいるのは死者と案内人、そして」

「……………」

青年は視線を芋虫の残骸に移す。あの異形は何だったのかという答え。

「人喰いです」

ウサギのから騒ぎ 1（後書き）

ちょっと短めですが、プロローグだけというのもあるんで、
やっと本題に入れます……。結局あんまり血みどろにならなかつ
たのが反省どころです。
では、よろしければ次回もお付き合いくださいませ。

ウサギのから騒ぎ 2（前書き）

前回、青年の一人称を間違えておりましたので、全て修正いたしました。
申し訳ありません。

ウサギのから騒ぎ 2

2

「うわーん！ 遅刻！ 遅刻だよー！」

黒髪の少年が、叫びながら森を駆けていく。がむしやらに進んでいく……ように見えて、障害物や人喰いの縄張りを器用に避けて通っていく。

少年は怯えきつた顔色で銀の懐中時計を開き”距離”を確認した。

「……あ、あと少し、あと少し」

錆びた鉄色の荊いばらを掻きわけ、ひたすら目指す地へ進む。棘とげが少年の頬を、手のひらを、膝こぞうを容赦なく傷つけていく。少年は眉を歪めながらも止まらない。

いや、彼 いや少女だろうか？ にとって、痛みは歓迎するものであって、むしろ傷つくたびウツトリしそうになるのをグツと我慢しているのだ。

「あーまずいなあ、まずいよう。寝坊した！なんて言ったら今度こそ喉首かつ斬られちゃう……。痛いのは好きだけど死ぬのは

ヤダよう……………」

悲壮な溜息を肺から搾り出して、目前に立ちふさがった崖を仰ぐ。

ぴょん。

手近な枝にひと息で飛び乗りさらに跳躍。短い手足でバランスをとりつつ、柔軟かつ慣れたフォームで固い大地に降り立つ。森を駆け回ることに関してだけは、少年の右に出るものはいない。
この茂みを抜ければ目的地のはずだ。

「うっ　　ごめんよアリスッ！…！」

「……………い、いない……………」

スライディング土下座の勢いで飛び込んでみれば、そこにあったのは何だかよくわからない消炭けしずみと一部分が焼け焦げた木だけで、まったく人影は見えない。

「どどどどうしよう、どうしよう……………。こ、ここで間違えないんだよね？」

時計を再び確認して、少年はがつくりと肩を落とした。…………はやく追いつかなければ。

追いかけるのはあまり得意ではないけれど、『声』が聞こえるほうへ向かえば合流できるだろう、きっと。

「逃げるのは得意なんだけどなあ……………」

少年は落ち着こうと、強ばる指でなだめる様に耳をなでる。それはロップイヤー種の兎耳にそっくりで、肌触りのよさそうな黒絹くろきぬめの毛が、警戒心に毛羽立っている。

ああ、あいつに見つかったらどうしよう。

「アリスう……」

座り込んで泣き出したい衝動をこらえて、少年はせわしく走り出した。見えない不安という化け物から必死に目をそらすように。

+

芋虫の成れの果てを眺めて立ち尽くす彼の手をとって歩く。

血の気が引いて冷たく、それこそ死体の手をとったような感触だった。死者とはいえ魂エネルギーという物質そのものには温度があるはずなのに。

「人間とは果実のようなものです。皮を剥むけば実たましいが芳醇な香りを放つ。それが人喰いを狂わせるんだそうです」

「……………」

「あなたは常に狙われる。その自覚をお持ち下さい」

青年がごくりと喉を鳴らした。

「さっきの……」

襲われた恐怖が甦っているのか、彼の視線がうつろに彷徨う。

「さっきの芋虫みたいのが……たくさんいるってことなのか？」

「……いえ。確かにさっきのような低級の人喰いはうじゃうじゃいますが」

「う、うじゃうじゃ………？」

「うじゃうじゃと無数に。数えるのもバカらしい有象無象どもです」

青年の声が引きつっている。

「でも本当に厄介なのは、人の姿をとるものですね」

「……化けるのか」

上級の人喰いほど知能は人間と大差がなくなる。

「そしてこちらの油断を誘う。知恵で惑わすものほどたちが悪いものはありません」

「……知恵で獲物をおびき寄せる、か。まるで食虫植物みたいだな」
「もしお菓子をあげるとか言われても、ついて行つてはダメですよ？」

性質の悪い例えに微妙な顔をする青年。それは私の笑えない冗談のためか、道の先への不安のためか。

「食われる、か」

青年は何を思い出したのか頭痛をこらえるようにこめかみを押さえる。声には出さずに彼は何事が呟く。

でもいつそ食われたほうがいいのかもな……、そう言っているように聞こえた。

青年はやりきれない表情で、ずれてきた眼鏡を押し戻す。

彼の死んだ理由も人生も、私は知らないし、興味もない。ただ何かを後悔をしていることは伝わってくる。

「なにか現世に心残りでも？」

言いながらも私は道なき道を切り開いていく。黒ずんだ鳶をナイフで払いのけ、人間を捕らえられる大きさの蜘蛛の巣を迂回する。

青年はうつむき、私と繋いだままの手を強く握り返す。まだその手はひんやりと冷たい。

「ない奴なんているのか……？」

「ふふ、確かに」

笑顔で死ねる人間など全体のどれほどだろうか。

私は会話しながら何気なく茂みにナイフを投げ打つ。鳥を絞め殺したような鳴き声とともに、忍び寄ろうとしていた『何か』の気配が途切れる。

青年がぎよつと身構える。

「……どのみち現世には戻れないのです。未練を断ち切れとは言いませんが、自ら人喰いに向かっていくような事はどうかなさらないで下さい」

時々いるのだ。来世なんて要らない、もう一度生まれて人間をやるなんて御免だという魂^{ひと}が。

「……………」

青年は、はいともいいえとも言わない。しょうがない、話を変えようか。

「声がする方向は変わりませんか？」

「え……………ああ。今は確かにもう少し右から聞こえる。少しずつ近くなっではいるみたいだけど」

「こっちですね」

すると少し開けた場所に出た。薔薇に似た形状の岩石がゴロゴロとしている。その岩はツルリとした陶器のような手触りで、乳白色の表面が月光を受けて青白い光を躍らせている。

幻想的ともいえる光景だが、この景観にいちいち感動するような感性の持ち主など、この森にはいないだろう。私を含めて、だ。
不幸な薔薇園である。

「ここは少々歩きづらいかもしれませんね」

「アリス、それで……………その」

「はい……………？ ああ、すみません」

そつえば手を繋いだままだった。

……………まあいい、このほうが歩みも早いだろう。どうもこの青年は考えに沈むと動作を止めてしまう癖があるようだから。

「はぐれないように。いけませんか？」

「……………あー、……………まあいいか」

青年は諦めたのか、溜息を一つ。

彼は岩場のさらに向こうを見据える。視線をはるか彼方、『声』のする方へ。

「なあ、アリス。この声はなんなんだ？」

「出口ですよ」

「……………あの、ごめん意味が、」

分からない。

と告げようとする声を遮って言い直す。

「出口が貴方と呼んでいるんですよ」

こつち、こつちだよ。ここにいろよ、と。

青年の反応は、眉を少し顰^{ひそ}めただけだった。だいたい理解不能な答えが返ってくるだろうと身構えていたのだろう。

「……………声の主は移動してるようだけど……………」

「そうですね、そりゃ動きますとも。出口ですから当然です」

「う、動くって……………、まさか探しているのは出口って名前の生き物なの、か？」

青年が困惑の瞳で見つめてきた。訳がわからないと。でも出口を見つければ自然と解ける疑問にわざわざ答えるのも面倒だ。

こつちとしては青年を守りきればいいだけのことで、その間どんな心理状態になるうが知ったことではない。一応、結構ひどい本音である自覚はある。

第一喋りすぎるとボロが出そうだ。

「その声が聞こえるのは当事者たる死者と、担当の案内人だけなんです」

「さっきも言ってたな。死者と人喰いと、案内人って」

「案内人は死者を人喰いから守り、転生への出口に導きます」

私は青年を引っぱって、岩場の影を縫うように移動する。少しでも見つからないようにするためだが、どうも先ほどから森の様子がおかしい。

「……それより気をつけてください」

「な、なんだ？」

「不気味に静かとは思いませんか？ 特に岩場に入ってから」

襲われもしない。人喰いの気配がちらともしないのだ。

人喰い 特に低級の人喰いは獣そのものだ。巨大な力を持つものへ取る態度は3つ。

つまり共生か従属か、もしくは忌避か。

しかしいていの場合、最後の選択肢が正解となる。

「ここに上級の人喰いがある可能性があります」

「……………それってまさか人型、の？」

「ええ……………」

周囲を警戒していた私は気づかない。そのとき青年が何かに気づいて、思わず口元を覆うところを。

ここは誰の縄張りでもなかった筈なんだが……………もしや『手当たりしだい』でも出たのだろうか。

「あ……………アリスッ！」

「どうしまし……」

た、と言いかけて青年の戦慄く指先がさすものを見た。

ああ、無理はない。これは 正視に耐えないだろう。ただし
この森では、そこらの木々ほどありふれた光景^{こうけい}。

「なん……だ、これ……」

「これで納得いきました……」

人と変わらぬ背丈の岩を一面の血が抱き込んで、純白の花弁を冒瀉
していた。異質な青の月光がそれを照らし出し、^{よど}澱んだ紫に染めあ
げている。

凄惨でありながら妖艶、そんな美しさを血薔薇は誇っていた。

「おそらく強力な人喰いが食事したあとなのでしょう。… がち合わ
なくてよかった」

「
」

ワイン色の薔薇を墓石に、原形をとどめないナニかが散乱している。
子供が無邪気に粘土をこねて遊ぶかのように、無茶苦茶な圧力でこ
ね回された肉体があちこちで潰れ、畳まれ、破裂し、^ね掟じり切られ
ている。

それはもう元人間としか呼びようのない、無残なオモチャの成れの
果てだった。

…… 上級の人喰いほど知能は人間と大差ない。ゆえに食べるため
だけに狩るとは限らない。

これだから、人型を取れるほど力を持つものは、性質^{たち}が悪いのだ。

「逆に言えば今ならここは安全です。ほかの人喰いたちが戻ってく
る前にここを離れましょう」

ああ、やっと気づいたのか。

勿体つけた意味深な言葉で混乱させ、会話の主導権を握っていればいけると思ったのだが。

しょうがないのだ。

あの馬鹿がまさかこんな時にまで遅刻するとは思わず、それっぽく演じては見たものの、ほとんどぶっつけ本番だったのだ。

まあ、不測の事態に弱い私にも落ち度があるといえはある、かもしれない。というか予想してしかるべきだったんだ、あの遅刻魔の駄目っぷり加減を………迂闊^{うかつ}。

青年はそろりそろりと握っていた手を開き、繋いでいた私たちの手がゆっくりと離れていく。

「死者じゃない、最初に襲われたとき人喰いは君を狙ってはいなかった。案内人じゃない、君は声が聞こえていない。僕を助けてくれたのは、それは、それは、案内人としてじゃないのか？」

確かにわたしは案内人と名乗った覚えはない。

「……………疑いますか？」

私が入喰いじゃないのかと。 自分を騙しているんじゃないのかと。

「ここでは誰も信用するなと言ったのはきみだ」

「……………それを撤回するつもりはありませんが、困りましたね……………」

…」

正直に話すべきか？しかし余計な疑念を招くだけに終わらないだろうか。

彼に対してはやましいことなど何ひとつないのだが
案内人でないのも本当のことです。まあ、

しかし私が口を開く前に、前触れなく背後に気配が沸いた。

「そうそう！ 人はみんな生まれついでに詐欺師な！のさあ！」

「っ！」

「！？」

「騙し騙され生きていく。それが持ちつ持たれつってやつだあね！」

私は咄嗟に右ふともものコンバットナイフを抜き放つ。背後の背後から抱きついてきた男の喉笛に、それをピタリと押し付ける。

「んねーアリス？」

「っディンガー！ 離しなさい今すぐ……っ！」

「えー。やーらかいし、もうちょっと」

「警告はしたわよ」

躊躇^{ためら}わず刃で掻ききる。しかしそれは何もない空間を滑っただけだった。

予想はしていたが舌打ちしたくなる。よりによって、こんな時にこんな奴が……

まるで計っていたように絶妙なタイミング。

「だめだめ、アリス。ぼくを殺したければあ、おれの気配ぐらい掴

めるようにならないとっ!」

ケタケタと笑う一人称の安定しない男。いつの間にか青年の真正面に、そいつはあぐらをかいて浮かんでいる。

その不審人物には、ビーグルの耳と尻尾があつた。白と黒、2色の包帯を身体にぐるぐると巻きつけているので、まるで囚人服を着ているように見える。

そいつは固まっている青年を興味深そうに眺めて意味ありげに笑う。

「な、なんだ...?」

「.....いいや?」

私は青年と駄犬の間に身体を割り込ませる。おかしなことを吹き込まれてはたまらない。私は目的をはやく終わらせたいのだ。

「何のようかしら、チェシャ犬さん」

デインガー チェシャ犬の目がニイと細められる。その目に虹彩はなく、白目の中央にこの森そのものの澱んだ闇がトグロを巻いているだけ。

「人間ねえ.....どうしたのアリス。 その子、携帯食?」

背後で、青年が息を呑んだ。

ウサギのから騒ぎ 2（後書き）

やっとチエシヤ犬を出せました。彼の一人称が一文で違うのはわざとです。

次こそ帽子屋登場………させたいです。

ウサギのから騒ぎ 3 (前書き)

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 3

3

「……………デインガー……………いい加減なと言わないで」

一歩、庇った背後で青年がゆっくりと後ずさる。

「アリスは……………」

「落ち着いてください」

なだめるように、私は努めて平静な声で話す。こういう時は慌てた方が怪しまれる……………もう無駄な気もするけども。

「あなたを食べるつもりなら、とうの昔に襲い掛かっていますよ。いくらでも油断なさっていたでしょう、私に対しては」

「……………」

腹の立つことに、チエシヤ犬がニヤニヤ笑って見ている。奴は事態を引つ掻き回すことを生きがいとしている公害生物だ。私は犬に警戒しながらも、ちらりと背後に視線を送る。

「私はあなたに誰も信用するなと言いましたね？ あんな不審人物
の言葉を信じてはいけません」

「……………じゃあ、」

青年は息苦しそうに喉に手をあてている。必死に状況を整理しよう
としているのか。

「……………じゃあ、アリスは結局何なんだ……………？」

「……………そうですね。どう、見えます？」

純粹に興味があつたのだ。この森において私は第3者の目にどう映
るのかと。

青年は戸惑い躊躇^{ためら}つて、瞳の不審を消さぬままに答える。

「わからない……………。ただ、死者じゃないことはわかるけど」

まあ、死者がこんなに事情をつらつら知っている訳がない。

「君は人があんな死に方をしているのに平然としていた。でも人喰
いから守ってくれた。それに……………そうだ、この世界にはカラスが
いない。なのに君はカラスが何か知っていた。ここにいるのは人が
案内人が死者だけなんだろう？ なのに何故？」

だから…………と、青年は目線のやり場に迷って俯いた。

「人喰いにも案内人にも……………人間にも君は見える」

アッハハハハハハ！

「！」

チエシャ犬から目を離れたつもりは無かった。なのに笑い声の主はどこにも見当たらない。

消えたチエシャ犬。今度こそ本当に舌打ちひとつ。

私は青年を 引き寄せて守ろうとしたが遅かった。

「すごい、すごいよ、大っ正解！ 愉快な死人にんげんだねえキミはっ！」

「ひっ ！？」

「たったそれだけの情報と時間で、全部見抜いたねっ！すごいよ！」

チエシャ犬の手が青年の頭を後ろから抱え込む。

「デインガー！」

その陽気な抱擁はまるで親しい友人との再会。身長差がさほど無いためチエシャ犬は地面から浮いている。

「そのとおりだよ坊や。……………今はそのどれもが正解なのさ」「っ！」

青年の耳元に寄せた口で、そつと優しく囁きかける。奴は生き生きとした目で、いらんことを吹き込む気が満々だ。

「どう、いう……………」

「よくお聞きよ青年」

チエシャ犬は実に楽しそうに。

「あれはアリス。気狂いアリス。彼女は人間でありながら人喰いと親しむのさ。 ねえ？」

「な……………」

そしてそのまま味見をするように、青年の耳に齧^{かじ}りついた。こ、この駄犬……………！

私はとつさにナイフを投擲する。

「離しなさい！！」

「おっとお」

チエシヤ犬がグラリとよろめく。うまく側頭部にナイフが突き立ったのだ。

私は取り戻した青年をまた背後に隠す。青年は放心し、少し出血した耳を押さえていた。

「うわーグツサリじゃん…………。どっかの遅刻魔^{おくちま}と違って、ぼくにこーゆー趣味はないんだよアリス？」

「どうせ空っぽの脳みそなんだから問題ないでしょ。勝手に味見なんかした罰よ」

「うわー、ひどーい。ちょっと甘噛みしただけでこの仕打ち！というか一瞬すぎて味なんてちいっとも分かんなかったしい！」

「水素より軽い口ね。いいからとっとと閉じてちょうだい。……………」

…すみません、大丈夫ですか？」

セリフの後半は背後の青年に向けて。

彼はチエシヤ犬を凝視している。側頭部に刺さったナイフが衝撃的だったのだろう。

なによりその状態で平然としているチエシヤ犬という存在が。

「……………これが、人型の人喰い……………」

「そういうことです」

青年の瞳が揺れている。私の背後にいてもまるで安心はしていないようだった。それはチェシヤ犬への恐怖心ゆえか、私への懐疑心ゆえか。

はあ。こうなったら正直に話そう。今更フォローできるかは分からなくてもだ。

「この森にいるのは死者と人喰いと案内人、けれど何事にも例外はありません」

「それがアリス……？」

「そーさあ、アリスは生身の人間なのだよ」

チェシヤ犬が空中で優雅に寝そべっている。彼は絆創膏をはがす気軽さでナイフを一気にひき抜いた。頭から首へとだら流れ落ちる血は、どぎついシヨッキングピンク。ペンキを引つかぶったような場にそぐわぬ陳腐さがむしろ異常さを際立たせる。

「で今回、案内人の代理を頼まれてるんだってさー」

正確にはただの手伝いだったのに、案内人が遅刻したせいで代理をするはめになったのだが。チェシヤ犬が知っていたのは驚きだが、こいつのことだ、盗み聞きでもしていたんだろう。

「アリスはどうやってこの森に………？」

私は肩をすくめて、どうということでもないと説明する。

「……………ちょっと飢えた兄に食べられかけましてね。逃げる内に穴に落ちまして、気がついたらここに」

「……………は？」

「どうして死ななかったのか、私にも分からないんですが」

嘘偽りない事実だ。こればかりは説明しろと言われても出来ないものはできない。

青年はあくびをしているチエシヤ犬をちらりと窺う。

「人喰いでもある”っていうのは……………？」

もちろん私は人を食べたことはない。

…………… だけど彼らと私たち人間はきつと同じなのだ。あの故郷での出来事が、私の奥底で絶え間なく主張する。

同じ種族でありながら起こってしまった、喰うか喰われるかの捕まれば終わりの鬼ごっこ。

忘れられる訳がない。

自分以外の動くものはすべて食糧、そんな人間と言う雑食種。共食いをしないだけ、人喰いの方がましではないのかとさえ思う。

「食べるものがなければ、人だって人を食べます。殺すことなんてもつと珍しくもない。たとえ血が繋がっていても、です。なら人間も人喰いとそう大差はありませんよ」

「……………でも」

青年は苦々しく薔薇の墓石を振り返る。

「人間に残虐性がないとでも？」

「……………」

極論に過ぎるかもしれない。しかし理解してもらおうなどとは思っていない。

青年は押し黙る。反論の言葉と、兄に食われかけたと言う私への当惑、人も人喰いが同いだと言い切られた嫌悪感、それらが物言わぬ彼の瞳にひしめき合っている。いやそれだけじゃない。

青年は苦渋に満ちた顔で額を押さえた。視線が過去を彷徨っている。

もしかしたら。

この青年は、殺されたからここに來たのだろうか。

「ねえねえ、もういいー？ お話し終わったあ？」

月を背にするチェシヤ犬を私は鬱陶しげに仰ぐ。こいつがこんな言い方をするってことは、

「……………もしかして一緒に来る気なの？」

「だってこんな面白そうなことないじゃん。おれを楽しませてよお、アリスちゃん？」

私はいま心底嫌そうな顔をしているだろう。

冗談じゃない。……………というのが本音だが、どう言ったって着いてくるに決まってる。

何より、身を切るほど悔しいが私ではこいつに勝てない。

「……………じゃあ、せいぜいナンパの盾になって貰うわよ」
「！？」

青年が目を見開く。

「はいはい、立派に騎士^{ナイト}の役目を果たして進ぜよう、お姫様と王子様」

チエシヤ犬はこれでも上級の人喰いだ。おかげでさつきから低級の人喰いが寄り付いていない。

便利な道具を手に入れたと思って先へ進もう。

しかしあっさりと同行を許した私に、青年はより疑念を膨らませてしまったようだ。人喰いとともに行くなど正気かと。

「大丈夫ですよ、デインガーはあなたに危害は加えません」

腹が膨れているようですから　　と言いかけて止める。青年も想像はついているのかもしれない。都合よく居合わせたこのチエシヤ犬こそが、先ほどの血薔薇の職人なのだと。

では行きましようと、私が差し出した手を青年は取らなかった。それも仕方ないかと溜息をついて手を戻す。チエシヤ犬がクツと笑うのを睨みつける。誰がややこしくしてくれたと思っているのだ。

「……………あっちから声がする。……………まだ遠い」

「ええ。行きましよう」

歩き出す私に一歩遅れて青年が続く。チエシヤ犬は私たちの頭上にふよふよと漂う。

青年のついた一つのウソに、私は気づかなかった。

+

死ぬのは怖かった。

今でも考えるだけで、ほら、こんなにも足が震える。

君にそうさせたのは誰でもない、僕なのに。

殺されてあたりまえな、ひどい男だったとしても、それでも。

……僕は死にたくなかったのだ。

どうしてだろうと考える。

こんなにも僕は、意地汚い男だったのかと。

自己嫌悪にかられても、それでも生きたかった理由はなんだったのだろう。

ああ、どうしても思い出せない。

血が視界を、部屋を染めて、君の泣き顔が目には焼きつく。

最後のドミノが倒れる刹那。

たしかに何かを呟いたのに。

ウサギのから騒ぎ 3 (後書き)

また短めですが、今回は2連続更新なんで、このあたりで。
もうちょっと疑心暗鬼へのプロセスを書き込めればよかった……
後悔先に立たずですね。

次こそ本当に帽子屋の登場です。

ウサギのから騒ぎ 4（前書き）

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 4

4

「うっう、遅刻、遅刻、まだまだ遅刻うっう」

少年がねじくれた木々の合間を駆け抜けていく。

淀みない足さばきに、迷いのない道の選択、ただそれだけを見ていれば拍手を送りたくなるほど華麗な疾駆で、しかし身も世もない情けない表情がその全てを台無しにしていた。

「間に合え、間に合え、間に合うかなあ」

やがて木がだんだんと減り、夜空が広がっていく。開けた場所に出たのだ。青い月明かりのもと岩の薔薇が咲き乱れている。そして少年の頬に冷や汗が光る。

ここは、まずい。

ひじょーにまずい。

迂回をしたいがそんな暇も余裕もない。もしこんな障害物の少ない

場所であいつに襲われたらそれこそ一溜まりも…………。

恐怖にかられた少年は、おそろおそろ周囲に視線を這わせ、視界の違和感に気づく。なんだろうと目を向けると、そこには葡萄酒^{ワイン}色の薔薇岩が1輪だけ咲いていた。

「うわぁ、えつぐいなぁ……………。やったの誰だろ」

でもこれはこれで、けっこう綺麗かも。

気弱そうに見えても、少年だってこの森の住人だ。自分に関すること以外にはとことん図太い。

そしてすぐにこんなことをしている場合じゃないと首をフルフルと振る。『声』に耳を澄ませて方角を確認、目標を少し西へ修正する。

ここで初めて少年は少しだけ油断してしまった。薔薇に気をとられて近づく気配に気づけなかったのだ。

疾走を再会しようとしたその時。ふと薔薇が陰り、その色を漆黒に染める。

何かが月光を遮っているのだと気づいた時には上空からバサリと羽の音。

「
ッッ！……！」

声にならない悲鳴を上げて少年は逃げ出した。

振り返りもしない。振り返らなくても分かる、確かめるまでもない！！

ジャバウオック……！！

チェーンソーが石を切断するような背筋の凍る音がする。

これは鳴き声だ、あいつが獲物を見つけた歓喜の雄たけびだ。けたたましい鳴き声が背後に迫り、警告が本能に爪を立てる。勘だけにしたがって岩を飛び越えうずくまる。

ガジュリと薔薇岩が噛み付かれて砕け散る。少年の背丈に等しい岩が 身代わりになって。間髪いれずに飛び出し駆ける。

アリス、アリス、アリスー！ー！！

追いつかれまいと少年は逃げる。たったひとつの救いを求めて。

+

時間は始まりより、さらに前へ戻る。

すべての発端、帽子屋のお茶会でのことだった。

常夜がのさばる森のはずれ。

崩れかけた教会は廃墟のようで、しかし闇に対抗する明かりがポツリポツリと健気に頑張っている。

その教会に入っても、子を抱える聖母像も十字架にかけられた聖人にも出会えない。

本来祭壇があるべき場所……そこでは、ふんだんに盛りつけられたパイやタルト、クッキーなどを囲んで3人と一匹がくつろいでいた。

私、アリスもその一人。

「あらまー、アリスちゃん！ どうしたのその痛々しい怪我は！？」
「んー……。まあちよつとね」

そんなに目立つだろうか？

「ああ、せっかく綺麗なお肌なのに……もったいないわよ。ちゃんと手当てしたのかしら？」

わたたと慌てる帽子屋に、私は気のない返事を返す。

「……………このままで、いいの」

最低限の消毒しかしていない頬の怪我を撫でる。ピリ、と走る痛み
に顔をしかめると、いまでもあの悔しさが甦る。

私のせいでお父さままで怪我させてしまった。

グイ、と手元のウインナコーヒーを飲み干した。豆を厳選するところから丁寧に気遣われた一品のはずが、ただの苦味しか感じない。
口の周りについたクリームを舐め取る。ほどよい甘さ。

「ああもう、ちゃんと味わってよアリスちゃん。一気飲みするものじゃありません」

めっ、と帽子屋は残念そうに羽耳を折りたたんだ。耳がある位置に鴉の羽が生えていて思うように動かせるのだ。

夜に溶け込む漆黒のシルクハットとスーツをそつなく着こなす男、帽子屋がこのお茶会の主催者だ。

といっても振舞われるものはコーヒーであって紅茶ではない。昔は紅茶派だったらしいのだが、ある人物のために宗旨変えたそうだ。

………は。人喰いにしては健気なことだ。

半ばヤケ気味にそう思って、白百合のようなテーブルの中央に手をのばす。目的のクッキー（イチジク味）を無造作にひっ掴んで口に放り込んだ。

「まったくもう………アリスちゃんたら。それで、おかわりはある？」

「……もういいわキサト。ありがとう」

「じゃあエンジュちゃんは？」

帽子屋 キサトの声にベットと戯れていた男が顔を上げる。

白くて短いウサギ耳を生やした男、円珠^{えんじゆ}。彼は膝の上にじゃれつく少年^{セツ}の頭を撫でる手を止めて首を振る。

「………いや、もういい」

その男は目元を黒い布で覆い隠している。彼は盲目なのだ。

「うっ、ホントにもう飲まない？ ……………腕に自信がなくなるわぁー」

キサトは大げさに肩を落とした。

私に断わられるより、円珠に断わられる方がダメージがでかいのだろう。楽しんでもらえているのか不安で仕方がないと。

彼（正確には男ではないのだが）は、いつだってキサトにそっけない。

それを見て不憫に思ったのかキサトの前に一つのカップが差し出される。

「む、むー」

先ほどまで円珠にじゃれ付いていた少年だった。耳と下半身がヤマネの愛らしい子供だ。

「……………いい子ね、マニィちゃん。でもなんだか余計に空しくなるの」

「……………む？」

キサトは一人いじけてテーブルに突っ伏した。彼の本性にそぐわぬ天使の持つような金髪が帽子に隠れて見えなくなる。

その時だった。円珠の耳がピクリとそよぐ。少し遅れて私も気がついた。

「あらあ、これは……………クロノちゃんかしら。いつも騒々しいのに今日は無言で登場なのね」

「……………こそこそ隠れながら移動してるような気配ね」

私も不思議そうなキサトにあわせて頷く。気配はあと到着まで20、10、8、6、……、……ゼロ。

「う、うつつお邪魔しますうう……………」

さらりとした黒髪に同色の瞳とウサ耳と尻尾。予想通りの少年

案内人の黒乃くろのが奥の窓の方から現れた。

そこから現れるということは裏から回ってきたのだろうか。ずいぶん複雑な森のルートを通ってきたようだ。

少年はなんだか疲れきってよろよろしている。

そのまま何とかテーブルまで辿りつき、キサトの引いてくれた椅子にふらりと座った。そして少年は座るなり、背もたれにダラリと身を任せきっている。

「なにやってんのアンタ」

「あう……………いきなり不機嫌だねアリス。……………、ぐすん」
「むー？」

とてととと近寄ってきたヤマネ少年が黒乃の袖を引く。どうしたの？とも言いたげな顔で。

「ああ……………優しいなあマニィは。僕に優しくしてくれるのはマニィと円珠さんぐらいだよ」

首を傾げるマニィを抱きしめ、黒乃はメソメソと泣く。実に鬱陶しい。

「ああ、私は優しくないっていうの？」

キサトは新しいコーヒーを淹れていた。そう言いながらも大して気分を害していないようで、出来上がったそれを黒乃の前に置く。ミルクは多めだ。

少年は手を持ち上げるのも億劫なのか、とろとろとカップを口に持っていく。

「優しいも何も……………キサトさん僕に欠片かけらも興味ないでしょう」
「そうね」

たった3文字であつさりと言いのける。態度は紳士だが、キサトの中身は鬼か魔王だ。

キサトは一見、優しく平等に振舞う。

しかしそれは飽くまで一見でしかなく、彼にとってはたった一人以外はどうでもいいが故の平等ゆえさなのだ。もちろん私も例外ではない。

「……………で、一体どうしたのよ。逃げ足だけは女王も呆れるあんたが、何でそんなに疲労困憊なの」

私はキサトが切り分けたタルト（これもイチジク味）にフォークをさす。キサトの手作りお菓子はほとんどイチジクがメインだ。この果実の味が、一番死者のそれに近いというのが理由。

「そうそう、聞いてよアリス……………頼みがあるんだ」
「頼みい？」

「うん……………ほら、知ってるでしょ？ 何でか僕ってアレに狙われるってこと」

アレというと……………。

黒乃の言葉に円珠がピクリと反応する。

「…………ジャバウォック？」

「そう！そうです円珠さん。最近見なくなったと思ったのに南ブロックでまた湧き出したらしくって……………うつつ」

「あらあら」

と言いつつもキサトは黒乃を見ていない。彼は考え込む円珠を気遣わしげに見守っている。

私は何でもないように訊ねる。

「…………それがこっち、北ブロックにも湧き出したってこと？」

「うん、南ブロックからこっちに流れてきたみたい。一匹だけだったし…………」

「で、遭遇したのね」

「うん…………さっき。な、なんとか撒いたんだけど…………」

黒乃はその恐怖を思い出したのか青ざめて震える肩を抱く。
なるほど、それならこの様子も納得がいく。

ジャバウォックとは『手当たりしだい』と呼ばれ恐れられる怪物だ。この人喰いが犇^{ひしめ}森にあつてなお、異端とされる異邦者^{よそもの}。どうして発生したのか、“城”のほうでも調べがつかないらしい。

人喰いも死者も案内人も関係ない。奴にとつては目に映るものすべてが食料であり、それこそが異端たる所以^{ゆえん}の一つである。

「城に陳情してほかの案内人を回してもらったら？ 討伐隊の出る一大事じゃない」

「い、いま南に手一杯だから、一匹ぐらい自分で何とか、しろ、って」

「……………そんなに余裕がないの？」

それもおかしな話だ。いや　　単にこの子が後回しにされただけか？

黒乃はなぜかジャバウォックを惹きつける。それはもう、人喰いを惹きつける死者のように。

彼さえ野に放って逃げ回らせておけば、他の案内人には目もくれはしまい。あの女王らしい非情な決断だ。

つまり南が片付くまでの時間稼ぎをしてろと。

「逃げ足が速いのがあだになった訳ね。ご愁傷様」

「うわあああん！やっぱり、やっぱり、アリスもそう思っつ！？僕もそうじゃないかと薄々さあ！！」

今もジャバウォックは黒乃を夢中で探し回っていることだろう。

「見捨てられたんだああ……………」

「……………手伝おうか、黒乃」

と、円珠が助け舟を出す。彼にタルトを切り分けていたキサトが、やっぱりと溜息をついた。そして黒乃を笑顔で威圧する。

『円珠に危険なことをさせやがったら唯じゃおかねえぞ』というセリフがキサトの背後に黒々と見える。

「……………うう……………嬉しいですけど遠慮します。むしろ命を狙う敵が増えちゃいます」

「？」

「？」

首を傾げる円珠とマニィ。気づかないって幸せだ。

「……ああ、もしかして頼みってそれ？」

「うん、そうなんだ！ アリスお願い、案内手伝っておくれよう！」

「……………はあ」

「あらまあ……………藁にもすがる思いなのね、黒乃ちゃん」

「私って藁なわけ？ ………………もう」

私はひとり興味のない顔を装って思考の海に沈む。

もし更なる怪我をしてしまったら

そうすると、またお父さまに心配させてしまう。それははっきりと嫌だ。

でも。

でも、アリスは一人でも戦えるのだと、そう示したいという想いが確かにある。

もうお父様の手を煩わせたりなんてしない。心配などいらないのだと。

「明後日、案内の仕事が入ってるんだ。逃げるだけなら何とかなし、城に留まってるうちは安全だけど……………」

黒乃は涙をうかべて必死で訴えてくる。

「さすがに死者を守りながら逃げ延びるのは厳しい……………ううん、不可能だよ」

可愛そうに。

その死者も黒乃のとはつちりを喰らって、女王に見捨てられたのだ。案内人としては下の下である黒乃だ。担当する死者も重要度は低いのだろう。

「うう……………僕、バリバリって食べられちゃうんだ、きつとお……………」

「いいじゃないの。あんた痛いの好きでしょ」

「いや死んでもいいほど、DMじゃないよ!？」

正直私はこいつがどうなろうと知ったことではないが…………。

「僕この仕事蹴れないんだよう、崖っぷちなんだ! 今度案内に失敗したらどうなるか」

「まあ、間違いなく白紙班行きでしょうね」

死ぬまで城の地下でこき使われると言う、案内人にとって恐怖の代名詞である班にご招待つてところか。

「お願いアリスッ! 僕に出来ることなら何でもするから…………! ね!？」

「何でも……………ねえ」

私は決心を固める。決して誰にも知られないように、顔には出さずとも。

「……………まあ、それならいいわ。頼まれてあげる」
「ほんとっ!?!？」

黒乃が輝く笑顔になる。感情のスイッチがパチパチ切り替えの激しいことだ。

「アリス、アリス、ありがとう……………!!」

ガッ。

抱きついてきた黒乃の頭をガシ掴んで剥がす。そんなぞんざいな扱いでも黒乃は笑顔だった。

「……………珍しいな」

「……………珍しいわね、あの面倒くさがりのアリスちゃんが」
「むー。むー!」

うるさい外野。

素直に喜ぶ黒乃とは対照的な訝^{いふか}しむ声を、右から左と聞き流す。

「……………はあ。それで? ”花” は一体どこに咲くのよ」

腕を組んで見下ろすと、黒乃はニコニコと涙をぬぐって頷く。

「えっと、それはね

」

それが単純な計画の始まりだった。

アリスは青年に対してやましいことなど何もない。

ただ話していないことがあったただけなのだ。……………まあ、多少意図的であれ。

アリスは言った。この森にいるのは”人喰い”と”死者”と”案内人”

そして”例外”が少し。

アリスの言葉に嘘はないが、真実すべてを語った訳ではない。

その例外の中に、死者にとって致命的なものが含まれていたというだけだ。

あらゆる生物の天敵である、ジャバウォックという怪物が。

ウサギのから騒ぎ 4（後書き）

一応フォモではないとフォローしておきます。

お茶会の部分はスラスラと会話が出てきて楽しかったです。
やっと登場人物が出揃ってまいりました。

ここまでが第一話『ウサギのから騒ぎ』の前編で、次からが後編にあたります。

ウサギのから騒ぎ 5 (前書き)

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 5

5

こっちは……マズい。

「……………本当に、こっちなんですね？」
「……………ああ」

青年に思わず確かめてしまったほどには、やっかいな領域に私たちは向かっている。

「ふんふん、これはまた」

デインガーはニヤけながら道の先を眺めて呟く。
そのふよふよと幽霊のように憑いてくる男の顔は、これから確実に起こる面倒な事態が楽しみで仕方ないと物語っている。

ただの案内がどうしてこつちも困難になるのか。

想定していた最悪のパターン全てを網羅していく勢いでついてない。

そもそもあの遅刻魔^{クソの}が責務を果たしていればこんなことにはならな

かったのに！

「……絶対に、私のそばを離れないでくださいね？」

念を押すと、前に行く青年はわかってしていると呟く。私はどう説明するべきか、一息あけて考えた。

「あの一際目立つ大きな木が見えますか？ あの腐食して半ば崩れかかっているあれです。あそこから先にはキノコの群生する丘がありまして、」

「人型の人喰いがいるのか？」

「………その中でも突き抜けてヤバいのが」

主に性格が。

カウント・スワロウテイル
揚羽伯爵。

その人喰いは三度の飯よりも人間の苦しむさまが好きという変人だ。小食であるにも関わらず、一日の殺人数は森でもトップクラスだろう。

同じ上級でもデインガーとは危険度が違う。それは爵位を城から与えられている時点で明確だ。

爵位といってもそれは人間界のように特権や領土がある訳ではなく、人喰いたちの危険度を表すための目安に、忌避と畏怖を込めて送られるものだ。

それは力の強さも多少は関係しているが、何よりどれだけ悪質かという意味合いでランク付けされている。

ブラックリストのようなものと思えば良い。

ディンガーが人間をめちゃくちゃに壊していたのは、子供が虫の手足をもいでみるようなもので、こうしたらコレはどうなるんだろう、というあくまで興味本位の行動だ。

満腹なら特に危険はないし、無差別殺戮も行わない。そもそも食欲より好奇心を満たすことを好む彼は傍観者であることが多い。

……考えが子供そのものなので、予測できない動きをすることもままあるが。

ディンガーが私の隣に移動し肩を慰めるように叩いてきた。ものすごくわざとらしい。

「うんうん、とつてもとつても大変だよねえ。分かるよアリス。でもさ、遠足つてのはやっぱりこれぐらいワクワクしないとね。ね？」

「……………」

やっぱり遠足程度の気まぐれか。

ディンガーに胡乱な視線を向ける私。

「ふふ、アリス、この先はキミがよくお世話になってる人喰いのところだしねえ。何が起きるか楽しみだね？ね？」

「……………はあ……………。否定はしないわ。楽しみつてところには反論したいけど」

伯爵と父が懇意なので、それなりに付き合いは長い。奴が私に危害を加えないのは、ひとえに私が父ヴェノムの養女だからという、ただそれだけの理由だろう。

青年はもう何も言わなかった。

私たちの会話は聞こえていたはずだが、ただ淡々と歩いている。

時折木々の間から視線を感じることがあるが、一定の距離を保ったまま何かが近づいてくる気配はない。

低級の人喰いがデインガーにビビりながらも、襲い掛かる隙をうかがっているのだろう。

油断なく周囲に気を配っていると青年の足が止まった。

目印のようにそびえる大樹の根元、しかしそこからは様子が一変していた。

「出口の方角は間違っていないんですね？」

再度確認する私に青年は小さく頷く。

「……やっぱりここは避けて、大きく迂回しませんか？」

「まだ呼び声が小さいから……。へたに迂回して聞き取れなくなったらまずいと思う」

「そう、ですか」

気乗りしないが仕方がない。

ああ、つくづくあいつがいれば話は簡単だと言っのに……。

「うわー、ここ来るの久々だなあ」

デインガーの至ってのん気な声が、頭上から降ってくる。

見上げると大樹の枝の上に悠々と寝そべっているお気楽道楽野郎が。

「壮観かな、壮観かな。ほら見てごらんよ、人間の坊や。見渡す限りのキノコ景色だ」

「い、意外に大きいんだな……」

青年が呆然とキノコを眺め仰ぐ。

まだキノコとの距離は充分にあるが、近づくことはお薦めできない。大小さまざまなキノコが、それこそ小指大のものから2階建の建物並みのものまでが、それらを上回る巨大な木々に所狭しと巢食っている。

キノコはそのどれもが激しい色彩を身にまとい、一つとして同じ模様がな

うつすらと妖しい霧が立ち込めて完全に奥まで見通すことは出来ないが、その毒々しい存在感は視覚に暴力のように焼きつく。

あらゆる養分を吸い取られたかのように木々のほとんどがぐずぐずに変色している。

その異様な支配領域に見入っている青年。

さつきから嫌な予感しかしない。

「もう一度言いますが、絶対に！ 私から離れないで下さい。いいですか、このキノコは……」

「アリス、あっちだ」

「っ、………え？ ……あつ、先行するのは危険です！ せめて私の後ろを歩いてくださいっ」

前に出て、青年を隠すように背後に押す。

ここは陰險な奴の領域だ。彼に先をいかれては罠があった時に対処できない。

「デインガー」

「はいはい、っと」

顎で指示し、ディンガーを一番後ろにして私たちは歩き出した。ディンガーを信用する訳ではないが、青年を最後尾になどできるはずがない。

ああ、黒乃、お願いだから早く来て…………、そして一発殴らせろ。

チエシヤ犬のはしゃぐ声をBGMに、乱立するキノコから成るだけ距離をとりつつ、それに乗っ取られた巨木の合間をジグザグと縫う。だんだん奥に行くに従って霧が濃密になってきた。一寸先は白濁の闇、とまではいかなくとも、確実に視界は狭まっていく。人喰いにとって何とも有利な環境の出来上がりだ。

「ほとんどどこを歩いているのか分かりませんね。出口の呼び声が必要れば遭難しているところですよ」

「……………」

一体どれぐらい歩いたのか。5分かもしれないし、1時間かもしれない。それともっとだろうか。

行けども行けども変わらぬ景色に、時間の感覚まで麻痺してきた。

アリス、と青年が私の名を呼ぶ。

「出口の方角が変わりましたか？」

「ああ、あっちの……………」

私は青年の示した方向に歩みを修正しようと

して、

「!？」

濃霧が。

分厚い霧がなんの前触れもなく膨れ上がった。

煙突に突っ込んだのかと勘違いしそうなほどの濃い霧が私の視界を奪う。

「そこを動かないで下さい！」

殺傷性のない逃走用の爆弾トラップを取り出す。すばやく地面に叩きつけ、吹き荒れる爆風で霧を払ったが時すでに遅し、だった。

「ちっ！」

まるでこの機会を伺っていたかのように、青年は姿を消していた。

……いや、まだ遠ざかる気配が感じられる。推測より青年の足は速かったがまだ追える！

「デインガー!？」

「いやあ、いやあ、まさかまさか。一気に霧が濃くなるなんて思わなかったなあー」

「っ、どう考えてもあんたの仕業でしょう!！」

さっきの霧はあまりに不自然だった。

それも伯爵の気配など微塵も感じなかった。青年の意図に気づいたデインガーが、面白半分で手出したのだ。

………やっぱりこいつは碌なことをしない！

暖簾に腕押しと、口論する暇も惜しんで駆け出す。

「いやー大変。こりゃあ予想外っ！」

「いいから黙って」

「全速ダツシュで喋ったら舌嚙むよアリス？」

「なら黙ってて!？」

「それは無理ー、僕は口から先に生まれたんだと曰ころ豪語を」

「あゝあそうっ！知ったことじゃないわよ！」

「あ、そーそー、ところでさあ」

チエシヤ犬は手をポンと叩いてさらりと、

「あの人間が言ってた”出口が遠い”ってアレ嘘だって気づいてた？」

「……………あーもうー！ー！！！」

読み違えた。何より自分に腹が立つ。

拳を強く、強く、ギリツと握り締める。爪が皮膚を突き破って血がにじむほどに、強く、強く。

出口の位置が分からなければ、私じゃ黒乃と合流できない。黒乃がいなければ『手当たりしだい』を見つけたのは難しいというのに。森はあまりにも広大なのだ。

というか青年のお守りなんて約束の内じゃないじゃないの。ジャバウオックと闘うことだけが私の役目だったはずなのに……………どうしてこんな面倒なことになるのだ。

黒乃、一発で済むと思わないでよっ！

*

一方、アリスの危険な決意を知る由もない黒うさぎ。

「つとあああああ！！」

黒乃は死に物狂いで駆け抜ける。

唯一自慢できる逃げ足は存分に発揮され、枝から岩へ、岩から磨耗した石像へ、その先に待ち受ける断崖絶壁すらものともせず飛び降り着地。

その着地点から流れるように飛びのくと、間一髪、腹に響く音をたててジャバウォックがそこに降り立つ。

「っひい！ あああああアリス様、神様、女王陛下ああああああ！」

涙を惜しげもなく滂沱と流し、凍える恐怖を肺腑から絞り尽くさんと叫ぶ。

背後のバキバキと薙ぎ倒されていく木々の悲鳴に顔が引きつる。

その音と奴の気配だけで敵との位置を測りながら、少年の命を懸けた障害物競走は続く。

「って、うひえ！」

とっさにしゃがんだ頭上をジャバウォックの尾が通りすぎる。膝を曲げた勢いのまま前転して、一瞬の間も置かずに跳ね起きる。少し後頭部を掠めたのか、じくじくとした痛みが脳に伝わる。

「はあっ、良い感じの痛み……じゃないじゃない！」

走る、走る、ひた走る。

首に下げた銀鎖の懐中時計が、黒乃の心音に同調するように激しく跳ねる。

「もお、もおいやだあ

！！！！！」

巨大キノコが群生する一角に、頭を空っぽにして突っ込んでいく。

黒乃、アリスというゴールまであと少し。

ウサギのから騒ぎ 5（後書き）

お、お久しぶりです。

プロローグを除いた全話、微妙に改稿しております。
本筋はさして変わりないのでご安心を。

お読みくださりありがとうございます。
次回は青年視点でお送りする予定です。

ウサギのから騒ぎ 6（前書き）

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 6

6

「こんばんは」

僕がここで目覚めて、まず認識したのはアリスと名乗る少女だった。

ふわふわとしたチョコレート色の髪に、鮮やかな新緑の瞳。

漆黒のエプロンドレスを身にまとい、コンバットナイフを携えて闘う少女に、最初は面食らったものだ。

死者の森に、人喰い、案内人。

死後にこんな世界が待ち受けていると知ったら、自殺する人も減るかも知れないと思った。

この森では誰も信用してはいけません。

出口が貴方を呼んでいるんですよ。

残念ながら、この森ではありふれたことです。

……………疑いますか？

.....。

「で今回、案内人の代理を頼まれてるんだってさー」

彼女がもし人喰いであるなら、案内人の振りなんてまどろっこしいことをする必要はないだろう。出会いがしらにとっとと食べてしまえばいいのだから。

でも上級の人喰いであるなら、それこそ獲物をなぶる猫のように、気まぐれな遊び心を起こしてもおかしくない、.....のかもしれない。

けれど彼女の一見冷静な態度に混じる、抑えきれない苛立ちや焦燥感
それらは演技なのだろうか？

「.....あつちから声がする。.....まだ遠い」

「ええ。行きましょう」

いや、アリスが何であろうと関係ないのだ。もう。

出口の呼ぶ声は、確実に近づいてきている。
きつと、そう離れていない場所だ。

アリスを振り切り独力で出口へ。今はその機会を窺おう。

*

嫌だ。

嫌だ嫌だ。

嫌なんだ。

僕は消えたくないんだ。

君を追い詰めたこの僕が、死んで当然のこの僕が、

コロサレテ当然のこの僕が生きたいなんて、どれほど恥知らずな願いか知っただけ……それでも。

だって、死んでしまったら

じゃないか。

*

まるで銀世界を彷徨うように。

立ち込める白霧が視界を占めて、雪山で遭難したかのような不安感に襲われる。

それでも僕はひたすら走る。

走るために生まれてきたのだと勘違いしそうなほど必死に走る。

おいで

脳に直接響く呼び声は、もうすぐそばから聞こえるのに。

こっち

ここだよ

出口はどこにあるんだ。

いや、そもそも見ただけで出口と分かる外見をしているのだろうか。同行者と別れたことに少し後悔しかけるが、何を今更と首を振って、沈みこむ思考を振り払う。

頭の中にまで霧が侵入したのだろうか。だんだんボンヤリと考えることが億劫になっていく。

ここにいるよ

近い。

それにしてもこの招き声は、どこか聴き覚えがあるような………？
ああ、駄目だ、頭が霞がかって何も分からなくなってくる。僕はど
うしたんだ。

ここにいるんだ

終わりの見えないキノコの迷路。

独りでいることに精神が絶えられなくなったのか、道の先に人影を
見たような気がした。

その幻は幻とは思えないような確かな実体を持って僕を手招いてい
る。

風に踊るストレートの黒髪、愛おしげに目を細めている、その人は
まるで………。

「

」

幻が僕の名を呼ぶ。優しく、優しく、囁くように。

小さく、けれど不思議に僕へと届く声。

ああ、もしかして、出口とは君のことなのか？

その幻の目の前にたどり着く。

幸せだったあのころのように、君の微笑には陰りの一つもなく、そのことがただひたすら嬉しい。

泣きはらしたと一目で分かる赤い目じゃない。

無言で憎しみをぶつけて来ることもない。

不幸や穢れなんて知らないような、……聖母のように穏やかな微笑みは思い出のままだ。

どうしてあんなことになってしまったんだろうね。

「最後に、どうしても伝えたかったことがあるんだ」

今の僕は、懺悔する犯罪者みたいな顔をしているだろう。………事実その通りだけどね。

君はただ微笑んで、ふわりと僕の頬へ手をのばす。

泣かないで。

そう言っているような気がした。

「」

ああ名を呼ばれる、たったそれだけのことで、最後の瞬間が思い出されてしまって苦しい。

……僕という原因を排除して、君は幸せになれただろうか。
今キミはこの微笑みを取り戻してくれている？

「ねえ、 。僕は……、僕はね
」

彼女をこの腕で抱きしめたくてゆっくりと手をのばし、

ダン！！

きいあああああああ！

「……………、……………え？」

大地を踏み抜く力強い音がした次の瞬間、彼女の額にコンバットナイフが突き立っていた。

「 騙されないでください！」

背後から追いついたアリスが、ふら付いた彼女と僕の間而降り立つ。

「な、なんで
」

「アレが人間に見えますか……………？」

な、何を言っているんだアリス。

だってほら、あんなにもナイフの刺さった額から、血が流れて

……ない？

「ちょっと失礼致しますね」

「は？」

………思いっきり頬を殴られた。………普通そこは張り手じゃないのかアリス。

そのお陰かどうかわからないが、ぼやけていた思考に活が入る。散らかっていた意識が焦点を結び、現実感を伴って殴られた部分が痛み始める。

「………きのこ、だな」

「ええ、キノコです」

彼女の姿はすでになく、そこにあつたのは身をくねらせ悶える巨大な毒キノコだった。

そのおぞましい姿に自然と後ずさる。

「だからキノコには気をつけてくださいと言ったのに」
「アリス………」

しょうがない人ですね、と顔に書いてあるアリスを見る。よほど急いできたのだろうか、少しでも頬を上気させて息も荒い。

「………その。すま、ない」

「もうこんな無謀なことは、二度としないでくださいね」

「ああ。もうしない」

「………よろしい」

したり顔で頷くアリスに、どこか安堵する自分を感じて不思議になる。

決して疑う気持ちが消えたわけではないけど……。まあどの道ひとりで、出口にたどり着くなんて出来ないとわかってしまったから。

あと一步で、あの醜惡なキノコに喰われていたと思うと、背筋に冷たい怖氣が走る。

何よりもキノコの化けた彼女を……。一時でも本物と思ってしまった自分に腹が立つ。本当に彼女を愛しているなら、偽者だと気づくべきだったのだろうに。

「あれー、なんだもう終わっちゃったの？」

幽霊よろしくふよふよと追ってきたチェシャ犬は、ぶーぶーと口を膨らませている。

しかし、アリスは実に嫌そうに首を振る。

「はあ、分かってるくせに適当に言ってるんじゃないわよディンガー。無論これからよ」

これから？と疑問に思う間もなく。キッと、アリスは背後のキノコを仰いだ。

「そうでしょ、カウントス」

「よおアリス」

僕らが背にした毒キノコから声が降ってきた。正確にはキノコの上から。

禍々しいその怪物の上で胡坐をかき、有閑なしぐさで水煙草を嗜む男が一人、当然ながら上級の人喰いだろう。

「ふうん、人間を連れてるなんて珍しいじゃねえか。保存食用か？」

その男は傲岸不遜な笑みを口元に、アリスを意味深に見下ろす。そしてひとつ煙を吐き出して。

「うん？ それとも土産か？」

「……………はあ。 どのつもこいつも……………」

男の科白^{セリフ}はどつかで聞いた様なものだった。アリスは疲れた溜息を吐いた。

ウサギのから騒ぎ 6 (後書き)

またもやちょっと短めですが。

あとラストまで2、3話ぐらいかと思われます。

ウサギのから騒ぎ 7 (前書き)

ちよつとだけ文章校正しました。

話の筋的には変更はありませんので、確かめなくても大丈夫です。

ウサギのから騒ぎ 7

7

『幽霊の正体見たり枯尾花』とは言っけれど、その花が化け物だった場合は洒落にならない。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわざわ、と。

次第に濃霧が晴れ、キノコの樹海はその正体を現していく。
ざわざわと揺れだす気配、それは私たちを取り囲む毒キノコたちの蠢動する音だ。

伯爵の出現を歓迎するかのようには、不気味なざわめきが満ちていく。
私の隣の青年が、落ち着かない様子で周囲を窺っている。それでも視線を伯爵から逸らそうとしないのは、本能が目を離してはいけないと警告しているのか。

「くく、お父様のお使いか？ アリス」

「カウント・エスごきげんようS伯爵。残念だけどはずれよ」

瑠璃アゲハ蝶の翅を背に生やした、黒尽くめの男

カウント・スワロウテイル揚羽伯爵。

奴はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて、煙を一つ吐き出した。

しかし嗤っではいても目に感情はない。まるで道ばたの石ころを眺めるような視線。

「ふうん？ なら聞くが、何だって人間のお守り何ざしてやってんだ？」

「あなたには関係ないでしょう」

「関係ない？ へえ」

くつくつと嗤う伯爵。

彼の視線が、ナイフが突き刺さったままの蠢くキノコを見やる。それは次第に動きを弱め、やがてクタリと動かなくなった。

「あーあ。俺のかわいいかわいい子供をブツ刺しといて、まあ言うセリフじゃないわな」

「……かわいい、ねえ」

きつとこいつは本気で可愛いと思っている。相変わらず趣味の悪いことだ。

「……アリス」

「あのキノコたちはほとんど思考能力を持ちませんが、一応低級の人喰いです。あの伯爵の手下のようなものですね」

私が青年にそれとなく説明すると、彼の喉がごくりと鳴った。キノコたちの合唱は未だ止まない。

それらは伯爵の手足となる代わりにおこぼれに預かるという、共生・忌避・従属の内、最後の項目を選択した者達だ。

伯爵の指がついと動き、その動作に引っぱられるように、死骸に刺さっていたナイフが彼の手に納まる。

彼はキノコの体液に濡れそぼったソレを一振り、元の輝きを取り戻した刃を見せつける。

「しかもせっかく俺の作ってやったナイフ^{これ}で。アリス、お前は血も涙もないのか？」

やれやれとワザとらしく首を振る伯爵に、私は肩をすくめる。
このナイフもトランプも、私の使用する武器の全ては伯爵のお手製だ。

ただの人間である私がこの森で生き抜くために、父が彼に製造を依頼した品々である。

「そら」

伯爵が危険な速度で投げ渡してきたナイフを、指で挟みこんで喉元の手前でとめる。
私はにっこりと。

「敵には一切の容赦なく、ってね。そうね、お父様に似たのよきつと」

「……………ほお」

返ってきた反応は予想通り。伯爵の翅が不穩にさざめく。

「……………ヴェノムに、人間ごときのお前が似た、と？」

人間をオモチャ程度にしか見ていない奴にとっては、これほど不快なセリフもないだろう。

「へえ………悪いなアリス。今のは笑うところだったのか？」

「ええ本当に。めずしく気が利かないわね、伯爵」

「そうかそうかすまなかった。ところでアリス、ヴェノムのかわいいアリス。俺はくだらん冗談なんてのを飛ばす奴は死んでいいと思うんだがどうだ」

ざわざわ。 ざわざわ。

空気が徐々に変質し、あからさまに口調に棘が混じる。剣呑な気配を帯びていく。

さっきまでの威圧感が針の筵むしろだったというなら、今は毒針の筵むしろといったところか。

じわじわと身体を蝕み、気がつけば手遅れになっている、そんな溶かしていくようなゆるやかな猛毒。

「な、なあアリス、何かまずい方向になってないか…？」

「……大丈夫です」

「そうは思えないけど………」

微笑んで落ち着かせようとしても、青年の怯えた表情は和まない。それはそうだろう。

霧の晴れたこの一帯には、そこかしこに死骸が転がっていたのだから。

ひしゃげた髑髏つやねいびく、風化しかかった骨、乾ききつて黒ずんだ血の痕。それらがキノコの根元に散乱し、青白い月光に浮かび上がっている。

ファンシーで毒々しいキノコの色彩が、その異質さを際立たせていた。
食べ残しなどがなかったため、悪臭がしないのが唯一の救いであろう。
……おそらくキノコが骨以外の全てを綺麗に食べつくしてしまうのだ。

……確かに、私では伯爵ほどの大物には勝てない。お父様の後ろ盾がなければ、さっきの時点で私は死んでいる。
けれど反りが合わないというだけで、考えなしに挑発したりはしない。もうすぐ
機会は来る。

ざわり、と森の気配が動く。

遠くからかすかに騒々しい気配がして、しかし私に神経を集中している伯爵はまだ気づいていない。

彼は煙をゆっくりと吐き出し、冷やかな視線で私を撫でる。

「……は。かの公爵に似ているとは。ずいぶん大きく出たものだなアリス」

「いいええ、別に。そんな意味ではなかったんだけど」

「こ、公………爵？ アリスの父親が……」

「ふん、誰が父親なものか。この子豚が勝手^{アリス}にそう呼んでいるだけだ」

「あらあら伯爵。もしかして羨ましいのかしら」

「……身の程を知れと言っている………」

ざわざわ。ざわざわ、と。

伯爵の機嫌が下降するにつられて、キノコの合唱が激しくなっていく。

「あははっ！ まー、まー、そんなのどうでもいいじゃん。あ、そうそう久しぶりい、お蝶伯爵っ」

チェシヤ犬の暢気な声が割って入る。空気を讀んだ上でぶち壊すのが彼である。

「……チェシヤ犬か。その呼び方は止めると何度言やあ分かる？」

「ええー、そんなの俺の自由だってばあー！。ねえアリス？」

「あんたはとことん自由よねえ……」

「だってさ、おちよー伯爵」

「……いや、いい。お子様に何言っても無駄だったな」

「あっ、ひどいや、ひどいよ！僕は、子供じゃないよ！」

どうでもいい、と心底面倒くさそうにしっしつと手を振る伯爵。ぶー、とむくれるチェシヤ犬をぞんざいにあしらっている。

「……それよりも、だ。俺の質問にまだ答えてねえぞ、アリス」

しかしそんな反応を見越していたように、チェシヤ犬は口に手をあててニタリと笑った。それはもう楽しそうに。

……今回ばかりは、こいつの考えていることが私にも分かる。

「……………」

伯爵が身じろぐ。やっと近づいてくる不穏な気配に気づいたのだらう。

「ふふっ、そうだねえ伯爵。それよりも何で、アリスが人間と一緒に

にいるかだったね。 教えてあげなよ、ねえアリス」

「ええ。いいわよディングー」

出口が近いからこそ、青年はひとりで逃げるなどとあんな暴挙に出たのだ。

キノコの森に入る前は彼の嘘に騙されていたから、こんな手段は五分の賭けだったけれど、ここが終着点なら話は別。

「私はね、黒乃に手伝いを頼まれたの」

ここに出口があるなら、必ずあいつと合流できる。

決定的な一言をにつこりと告げてやると、 伯爵は水煙草の

吸い口をカラリと落とした。

「見つけたっ！ たっ、助けてアリスーーーー！！！！」

一心不乱に黒乃が駆けてくる。 あらゆる障害物をなぎ倒しながら飛ジャバウォックんでくる怪物を引き連れいてる。

青年は思わず私に一步身を寄せる。 恐怖ゆえの反射行動でもあったのだろうが、それでも私の傍から離れる気配がないということは、父が公爵と知ってもそれほど動揺していないということだろうか。 いや今更そんな事実が判明したところで、私の怪しさは以前変わらないとそれだけの事かもしれない。

見えざる脅威より、目の脅威。 そういうことだろう。

「う、わ、こ、こっちに来る……！ あれは！？」

「ああ、あれはジャバウォックという異分子です。 あの子供は……、

とりあえず説明は後で」

私はトランプを黒乃の背後めがけて投げ打ちジャバウォックを牽制する。それらはやつの皮膚に接触すると同時に起爆。振りまかれた煙がジャバウォックの視界を塞ぐ。

これぐらいの火力で傷を与えられるとは思っていない。

黒乃はその俊足でいつきに距離をつめて、私の背後に駆け込む。自分の守るべき青年にも気づかないほどの恐慌っぷりだ。なんとも情けない。

「……………あんたねえ」

「ああああ、アリスっ！　よ、よかったあああ」

僕生きてる、と安堵の涙を浮かべる少年は、そこではたと気づく。トランプ爆弾を掻い潜ったジャバウォックが、様子を窺うように滞空していたのだ。

3つ首の恐竜に似たその怪物は、上級の人喰いを警戒しているようだ。

チェシヤ犬は我関せず、少し離れた場所からニヤニヤと状況を楽しんでいる。

「あ、えつと？　ここって伯爵の……………。わあ、お久しぶりですラピスラズリ伯爵！」

やっと周りが見えてきた黒乃が、毒キノコを振り仰ぐ。

伯爵は水煙草を取り落とした姿勢のまま固まっていたが、眼が合うと同時に見てはならないものを見てしまったかのように身じろぐ。

「……………う、く、黒乃……………」

「えっ、ど、どうしたんですか、ぼ、僕なんかしましたか?!」
「……………い、いや……………」

心なしか青ざめた伯爵に、おっもしろーい、と笑うチエシヤ犬。そしてその笑顔のまま、おもむろに黒乃の首を黒爪で掻き切った。

「いゝわっ!?! 頸動脈近っ!?! ちょっ、ひゃうっ血が! 血が! 今それどこっ……………じゃ、な……………! あうう」

「わー、とか言いつつすごい顔赤いねー。うわー、恍惚って感じだー!。はい、止血」
「ひ、えっう」

チエシヤ犬は黒乃の細い首を加減なく握りしめる。それによって傷が深まったのか、少し動脈を傷つけたのだろう、人に似た鮮やかな赤い血はだらだらと掴む腕を流れ落ちていく。

「ねね、痛いってどんなの? 今どんな感じ? 怪我しても痛みって感じないんだよねえ僕は」

「ふ、うええ、無邪気な言葉攻めなんて、初めてだよー……………でももっと!」

「う……………っ」

「わあ、伯爵すごい鳥肌っ! 本当に遅刻魔くんが苦手なんだねえ!。あははははは!」

伯爵は冷や汗を浮かべ、ケタケタ嗤いころげるチエシヤ犬を忌々しそつに一瞥する。

S伯爵、イニシャルとは関係ないのだが、彼は根っからのサディストだ。苦痛や恐怖に歪む顔を見ることに喜びを見出す変態だ。だからこそというか……………。いたぶってもむしろ喜ばれてしまうよう

な、黒乃という生き物が理解できないらしい。

伯爵は凍えるまなざしはそのままに、一つ舌打ちをしてゆっくりと立ち上がる。

「…………ヴェノムに、ペットの躰はちゃんとしろと伝えておけ」

伯爵は私に地を這うような声で吐き捨て、じわり、じわりと、その黒尽くめの姿を歪ませていく。
線が点の集まりであるように、輪郭がバラバラになってナニカに帰ろうとしているのだ。

勝った。

「ええ、伝えておくわ。ご機嫌よう伯爵」
「…………ふん」

ついに点はその連結を放棄し、一つ一つ線を崩して蒼き月へと舞っていく。

バラバラ、ひらひらと。それらは幻想的な燐光をはなつ、瑠璃色のスローウテイル揚羽蝶の大群だった。
後には主に見捨てられた水煙草だけがぽつりと残されている。

キノコはやがてざわめくことを止め、森は穏やかに静寂を取り戻していく。

「消え…………たのか？　なんでだ？」

戸惑う青年に肩をすくめて返す。伯爵と対峙していたために、背に汗がびっしょりなのは気づかれたくはない。

「伯爵はこの黒乃が大の苦手なんですよ。……まあ、相性のことん悪いといえますか」

「はあ、激しかった。伯爵、僕は嫌いじゃないんだけどなあ。異物を見るみたいな眼を向けられるとゾクゾクするんだよ」

「この子が強いってわけじゃ……なさそうだな。何となく分かった。怪我はほつといてもいいのか……？」

「ああ、案内人の生命力は人間とは比べ物になりませんよ」

「この子が案内人なのか!？」

バサリ、と大きな羽ばたきに我に帰る。伯爵は去り均衡状態は破られた。

「黒乃、出口へ!」

黒乃をとつさに突き飛ばす。突っ込んできたジャバウォックの鋭い爪は空を切った。

私の背丈の2倍はあろうかという巨体は、通り過ぎるだけで爆風を巻き起こす。

ヘタにぶった斬る訳にはいかない。もちろん芋虫の時とはわけが違う。奴は斬った端から分裂し増殖する、ひたすら厄介な性質を持つのだ。

ナイフを逆手に握りしめてジャバウォックと相対する。

さあ、頭を切り替える。

私はずっと……この時を待ち望んでいたのだから。

「……………覚悟なさい。今度こそ一片も残さずに殲滅してあげるわデカ物！」

「……………！？」

黒乃がギョツと振り返る。青年の腕を取りさつさと離脱しようとしていたようだが、一体何をもたもたしているのか。

「…ちよつと！」

私は黒乃に追いつがろうとしたジャバウオックの尾に斬り付けて、注意をこちらに惹きつける。

おそらくこの怪物の表皮は、ダイヤの硬度10を上回る。謎の物質から作られた伯爵製のナイフだからこそ、かろうじて傷を負わせられているのだ。

「黒乃！ 何やってるの、早く行きなさいっての！」

「っていうか、アリス、まさか怪我した理由って……………」

青年も気づいたのか、私の頬の怪我を凝視する。

「……………ああああ！！ 僕を餌にしたんだねアリスー！？」

正解。

黒乃に手伝いを頼まれるよりも前、たまたま遭遇してしまったジャバウオック。

……………私は思い切り苦戦した。

ジャバウォックとの戦闘が初めてだったから そんな言い訳はしたくない。なんと言おうとあれは私の徹底的な敗北だ。

あぐく何体かに分裂させてしまい、父の手を煩わせてしまった。しかも父は私を庇って怪我まで負った。

どれほど、どれほど深く、身を切るような自責に苛まれたことが。

今、相対するこのジャバウォックは逃がしてしまった最後の一匹。

「あんたのおかげで、早く見つけたわ！」

「って、そもそもこれアリスのせいなんじゃないかー!?」

「そうとも言っわね！」

「ひどい!？」

「あ、アリス……………」

だから多少は悪いなーと思って、律儀に青年を守り通したんではないか。

私は話しながらも、無茶苦茶な軌道で襲い掛かってくる3つ首をギリギリの動作で受け流す。

早く出口へ行ってくれないものか。 実を言つとあまり喋っている余裕はない。

「でも、私が仕留め損なつたのと、あんたが襲われたのは別問題で、しょっ」

「……………うっ」

「アンタが、遅刻しやがったのもっ、別問題よね？」

「……………うっ!」

「分かつたらさっさと行きなさい」

黒乃を絶対に逃がすまいと、ほぼ同時に襲いかかってくる3本の首。

それぞれに目掛けてトランプを投擲、狙い変わらず瞳に命中。爆音とともに3本の首がのけぞる。そしてガラスを引っかく音に似た、背筋のあわ立つ咆哮が響いた。

「今！」

「あー、うー、……頼んだからね、アリスっ！」

黒乃が今度こそ戦域を離れようと青年の手を取るのを確認して、これで戦闘に集中できると安心する。

ジャバウォックは爆発で視力を、硝煙の匂いで嗅覚を一時的に失くしている。だがそう長くは持つまい。やるなら今。

血でべとつくナイフをより大きな新しいものに持ち替え、構えなおしたその時。

「これでアリスはリベンジに成功。青年は転生を果たして、みごと幸せになりました。めでたし、めでたし？」

不吉な予感が声となって降ってきた。

構えを解かぬままに見上げた先では、チェシャ犬がニタリと笑んでいるではないか。

「でもそれじゃあさあ。面白くなんて、ないよねえ？」

よっ、と軽い掛け声とともに、チェシャ犬の身体から解けた包帯が、急速に怪物へ触手を伸ばす。

白と黒の2色はジャバウォックの胴に絡みつき、絞るように締め上げて、締め上げて、締め上げる。

こいつが私達を助けようとする訳がない。
なら、この行動は

「…………まさかつ」

グジュリ。

形容しがたい異音を発して、それは真つ二つにねじ切られた。

ジャバウオックは、分裂するのだ。

*

「ねえ、あのねエンジュちゃん。今、カウント・エスS伯爵がいらして、新しい水煙草を取りに来ただけだね」

いかにも気乗りのしない風の声が聴こえて、盲目の五月ウサギ

円珠はコーヒーを飲む手を止めて振り返る。

寂れた教会の入り口、そこに佇む帽子屋のもの言いたげな気配に悟ったのか、彼は一つ頷いて傍らの刀を取り立ち上がる。まるで目が

見えているかのような自然な動きだった。

先ほどまで彼の膝に座っていたヤマネ少年が、心配そうにその手をとる。

「むー」

「……………やっぱり、行くの？」

「やはり黒乃が心配だ」

「うーん、本当は賛成したくないんだけどねえ。エンジュちゃん、怪我させたくないもの」

何を言っているんだと、円珠はゆるりと首を振る。

「……………そんなへまはしない」

「知ってるけど。万一のことを言ってるのよ」

はあ、とまるで心配性の母親みたいな手つきで、頬に手をあてて溜息をつく帽子屋。感情を表すように、彼の羽根耳がしゅんと下がった。

「マニィ、留守を頼むな」

「むー、むー！」

まかせとけ、と胸を張って了承するマニィ。円珠は少年の健気な様子にわずかに微笑んで、その頭を撫でる。

「いい子だ」

「……………エンジュちゃん」

非難の目を向けるキサトにも、円珠は頑なに主張を曲げない。

「それにキサト、ジャバウォックを滅するのは」

「案内人としての義務、でしょう」

「そうだ。……元案内人といえどそれは変わらない」

「………はあ。ホントに呆れるぐらい真面目よねえ、エンジュちゃんって」

「そう………なのか？」

「そうですとも」

しょうがない、とキサトは茶会の片づけを始める。

片付けといっても、シルクハットを脱いでそこに何もかもを放り入れるといふ何とも荒っぽいやり方だ。

湯氣を立てていたティーカップも、出来立てのフィッグパイも、無造作にぽんぽん放り込んでゆく。

その中がどうなっているのか不思議である。

最後に残った純白のテーブルクロスを押し込んだらこれにて準備完了。

「………さ、そこまで言うんなら付き合いましょ」

ちょっと、キサトは帽子を被りなおして、角度を調整しながら微笑む。円珠は、なぜそんなに着いてきたがるのか、とばかりに首を傾げている。

「………別に（着いて来なくても）構わないんだが」

「そんなつれない事言つと、キサト泣いちゃうわよー」

うむと円珠は頷く。

「……いい大人が泣きわめくところなど見たくはないな。見えな
いが」

「……ホントに泣いちゃっていいかしら？」

「むむー、むー（いってらっしゃーい）」

適当な軽口を叩きあいながら、彼らは朽ちた教会を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1274d/>

A L I C E in the DARK

2010年10月10日18時53分発行